

閉会の辞

海上自衛隊幹部学校長 福本

海上自衛隊幹部学校長の福本でございます。本日、午前中から熱い、大変素晴らしい内容の発表や質疑が行われてきましたが、この防衛省及び海洋政策研究財団共催によります本日のシンポジウムを閉じるに当たりまして、私のほうから一言ごあいさつさせていただきます。

未曾有の災害となりました、東日本大震災から約1年半が過ぎました。これに呼応する災害派遣において、自衛隊は過去最大級の統合オペレーションを行うことになりました。

本日、パネラーとしてご出席いただきました、アメリカ、オーストラリア、イギリス、あるいは本日フロアにも多くの各国武官の方々もおいでになっておりますが、それらの国々からたくさんの支援の手が伸べられましたことに、まずはこの場を借りて、あらためて感謝申し上げます。

一方で、この大災害を通じて、かような自然災害において、自己完結性のある軍事組織による捜索、救難活動の有用性が広く国民に確認されましたと同時に、中でも我が国のような島嶼国家におきましては、海からする捜索、救援が重要かつ不可欠であることも証明されることになりました。また、そうした平時における総合的な国力の活動状況が、この地域の周辺各国に与えた安全保障上のインプリケーションにつきましても大きなものがあつたと考えています。

さて、この海洋安全保障シンポジウムは3年前、やはりここ横浜大栈橋で、同じく護衛艦「ひゅうが」の艦内にて開催されて以来、第2回目を数えることとなりました。午前及び午後のパネルディスカッションにおいて、今回も各参加者から素晴らしい発表と参会者の方々との活発な議論が行われたことに皆様の海洋安全保障への関心が高いことが確認することができました。また、前回と同様、防衛省と共催いただきました海洋政策研究財団には、心から感謝と敬意を表したいと思えます。ディスカッションを通じて、国あるいは組織の垣根を越えた相互理解が進み、パネリストの皆様だけではなく、参加された全ての皆様がそれぞれ得るところがあつたのではないかと考えています。

さて、今回のシンポジウムでは、海洋安全保障のグローバル化と海上自衛隊をテーマとして、さまざまな側面から議論をしてまいりました。午前の第1部では、海上幕僚監部防衛部長、山下海将補の基調講演に始まり、我が国の安全保障への取り組みをテーマに現下の海洋を巡る諸問題と海上防衛力のあり方について、フロアに参加された大学生の質問を含め、真摯な議論が行われました。

ここで、第2部から参加された方々に、山下防衛部長による基調講演の一部を振り返ってみたいと思えます。山下防衛部長による講演ということで、場所的にも「山下講演」と呼ばせていただきたいと思います。これは翻訳がとても難しいと思えます。

近代日本のシーパワーは、約 150 年前、鎖国で海外との交流を大きく制限していた日本が、欧米列強により開国を迫られたことにより、始まりました。国民に大きな負担を強いても巨額な資金を投入し、欧米から購入した、見様見真似で建造した軍艦と商船で、海軍、そして商船隊が作られました。

それから 90 年、小さな海軍は世界最大の戦艦、世界有数の空母部隊を中核とする世界第 3 位の大海軍に成長しましたが、その栄光も昭和 20 年に終わりを告げます。帝国海軍は壊滅し、商船隊の多くは潜水艦などの標的となり、機雷に埋め尽くされた日本周辺の港湾、航路は使用不能、貴重な食料資源を得るための漁業活動すらできず、終戦後も残る機雷への触雷により、数多くの尊い命が犠牲になり続けました。

そのような危険な状況を打開するため、日本政府は連合国の指示により、横須賀、呉、佐世保の各鎮守府、及び大阪、大湊、各警備府が機雷の掃海作業を開始。続いて下関海峡の日本海方面への掃海を再興するに及び、海軍省軍務局、その解体後は第二復員省地方復員局内に掃海部、地方に 6 つの地方掃海部と 17 の地方掃海支部を設置し、組織的な業務体制を構築、日本周辺海域の掃海作業に着手いたしました。その後、復員省の解体とともに運輸省海上保安庁掃海部、さらに同庁航路啓開隊と、組織や名称が変遷しつつも、旧海軍軍人達を中心に編成された掃海部隊の船や隊員たちは変わることなく、連綿と機雷除去作業に従事いたしました。この間、昭和 27 年 5 月に安全宣言が出されるまでの間、78 名もの隊員が殉職いたします。「戦争も終わったのに、何を好き好んで、ばかなことに志願するのだ」と揶揄されながらも、身の危険を顧みず、日本復興のために身命を賭した隊員たちがいたことを忘れてはなりません。

昭和 29 年、海上自衛隊が創設されると、この部隊は掃海隊群として海上自衛隊の一部となります。海軍の DNA は一時も途絶えることなく、航路啓開隊を経て、海上自衛隊に受け継がれているのです。

しかし、海洋国家日本の海洋力という視点に立つとき、海上自衛隊はその一部を占めるに過ぎないことを忘れてはなりません。日本は国土こそ狭いものの、領海と排他的経済水域を合計した面積が約 447 万平方キロメートルで世界第 6 位の海洋大国であります。この広大な海域の治安の維持に当たっているのは、海上警察力たる海上保安庁です。特に尖閣諸島を始めとする国境の島々が最近、焦点となっていますが、今、この瞬間においても、海上保安庁の巡視船艇は、我が国の主権を守る第 1 線、ファーストライン・オブ・ディフェンスとして活動しています。

次に、国家の海洋力の別の側面である日本の海上交通に目を向けてみましょう。四面を海に囲まれた我が国において、トン数ベースで輸出入貨物の 99.7%を担う外交海運は、我が国経済、国民生活を支えるライフラインとして極めて重要であります。我が国の生命線とも言える、このシーレーンをいかに守ってきたのか。これからどう守っていくのか。本日もさまざまな意見が示されましたが、海とともに暮らし、海とともに生きる海洋国家にとって、永遠のテーマであると思います。

今、行われました、午後の第2部では、海洋安全保障の課題と国際協調への展望をテーマに多彩なパネリストにより活発な議論が行われました。在日米海軍司令官のクロイド少将、在京英国大使館付国防武官エドニー大佐、在京オーストラリア大使館ホーキンス1等書記官から、それぞれの国から見た、海洋安全保障のビジョン、国際協調への展望が示されました。

防衛省西防衛政策局長、外務省石井地球規模課題審議官からは、我が国の安全保障政策を担う防衛省及び外務省からの興味深い視点が示されました。

海上幕僚監部の大塚指揮通信情報部長からは、海洋安全保障と国際協調に係る海上自衛隊のアプローチについて発表がありました。

これら卓越したパネリストによる発表とディスカッションから見えてきたものは、アジア太平洋地域の持つ重要性とグローバルな海洋安全保障において、国家の繁栄を海洋の自由な利用に依存している国同士だからこそできる多国間協力の可能性であると思えます。

今日、アジア太平洋地域は政治的、経済的に世界の基軸、ピボットとなっています。2009年、オバマ大統領はアメリカ合衆国をアジア太平洋国家と呼び、自らを初めて太平洋大統領と宣言いたしました。本年1月に発表された新しい戦略ガイダンスでも、アジア太平洋地域が米国の安全保障政策で重要性を増していることが示されました。

アジア太平洋地域は、21世紀における国際政治の焦点になりつつあります。経済的には21世紀に入って低迷する世界経済の中で目覚ましい成長を遂げ、世界経済を牽引しているのは、中国やASEAN諸国の経済的パワーです。アジア太平洋には国民総生産において、世界第1位から第3位の国が存在しています。アジア太平洋地域は世界の経済の中心でもあるのです。

一方で、アジア太平洋地域は、多様な民族、宗教の集まりでもあります。異なる価値観や多様な国益、さまざまな国情が海洋秩序維持のための協力、特に主権に関わる問題についての協調を難しくしているのも事実であります。それぞれの国家が海を介して経済や文化の面で複雑に結びついている今日、国、人種、思想が違えども、その海を囲い込んで陸地化するのではなく、海が人類の公共財及びフリーダム・オブ・ナビゲーションという価値観を共有すべき時代にあるものと思えます。このような価値観を共有し、こうして対話を重ね、相互理解のための取り組みを深化、発展させていくことが、国家間のさまざまな課題を、紛争や偶発的な武力衝突を防ぐことにつながるものと信じています。

ここで1枚のスライドをお見せしたいと思います。今年の夏、ここ横浜を舞台とした1本のアニメーション映画が公開されました。広い年齢層から愛される国民的アニメ映画製作者、宮崎駿氏企画、脚本による映画『コクリコ坂から』です。物語の主人公である少女の父は船乗りでありましたが、先の大戦後、父が乗る貨物船は日本海を航行中、浮流する機雷に触雷し、帰らぬ人となります。少女は横浜の小高い丘にある家の庭に、

来る日も来る日も、国際信号旗「UW（ユニフォーム・ウイスキー）」、すなわち「安全なる航海を祈る」という意味の信号を掲げ、沖行く船の航海の無事と父の帰りを信じ、待ち続けるのです。

先の大戦においては、数多くの商船乗組員を含め、あまたの命がこの海の藻屑となって散っていきました。私達はこの物語の少女のように悲しい思いをする子どもを二度と生じさせてはならないのです。「守る、この海、夢、未来」。これが明日から事前公開が始まる今年度観艦式のテーマであります。私達は本日のシンポジウムに参加いただいたパネラーの方々のご発表や、参会者によるさまざまな議論を通じ、この海を守りゆくことを誓い、そして将来にわたり、この海に夢と未来を描くことができることを確認することができました。

最後にご質問いただいた一般公募で来ていただいた方のご質問は、私は非常に印象が残るものでありました。海洋における、我々の活動というのは、日本だけではなく、アメリカ、イギリス、オーストラリアの海軍も同じなのですが、なかなか国民の皆様に見えにくいところがあるということ、今日のご発言でもあらためて感じたところでもあります。明日から始まる観艦式なども、その1つの手段ではありますが、私ども海上自衛隊は少しでも国民の皆様にご我々の活動を説明し、ご理解いただく、海で何が起こっているかということをご皆さんによく知っていただくということ、さらに努力しなければいけないということも感じた次第であります。

本日は、パネラーの皆様、そしてフロアにご参会していただいた皆様、そしてこのシンポジウムに応募して、この場に来ていただいた皆様、本当にご参加ありがとうございました。今後とも、この海洋の安全保障ということは我が国にとって喫緊の課題ということでもあります。我々はこのようなシンポジウム等、話し合いでもって、何か1つの解を求めていけることがあるのではないかというふうに考えるところであります。海上自衛隊60周年に当たる節目の年、この「ひゅうが」に集って極めて有意義な話し合いができたものと考えております。本日は、午前中からご参会していただいた方を含めまして、長い時間、本当にありがとうございました。これをおもちまして、私のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。